

# 斎藤茂吉と浅草寺

小 泉 博 明\*

【要旨】 斎藤茂吉は、金龍山浅草寺への信仰心が篤かった。茂吉は、郷里の山形県金瓶村から上京し、浅草三筋町にある養父紀一の経営する浅草病院へ寄寓した。茂吉は、紀一の期待に応え精神病医となることが宿縁であった。茂吉の信仰の原風景は出羽三山の山岳信仰と宝泉寺佐原隆應による浄土信仰であった。上京後は、折りに触れ浅草寺に参詣し、観音力にすがり、自らの艱難辛苦を超越するために、自らの為に祈願し、額づくのであった。茂吉は、観世音菩薩に帰依するが絶対他力ではなく、自力のために観世音菩薩に祈願するのであった。また、茂吉は諸々の神明の加護を求め、汎神論的な世界のなかで生きていたのであった。

## 1. はじめに

斎藤茂吉の作品における宗教性、とくに仏教との関係について断片的に論じたものは少なくないが、仏教文学の系譜に位置付けられるものではない。本論では、茂吉の金龍山浅草寺への信仰心を手掛かりにして、茂吉の仏教観を論ずるものである。

茂吉の故郷は山形県<sup>かみのやま</sup>上山金瓶村である。真東には蔵王山が聳え、茂吉は朝夕に蔵王権現の名を冠する霊山を仰ぎ、育ったのである。

<sup>みちのく</sup>陸奥をふたわけ<sup>そび</sup>ぎまに聳えた<sup>ざわう</sup>まふ蔵王の山の雲の中に立つ

(『白桃』昭和9年「蔵王山上歌碑」)

詞書きには「六月四日、舎弟高橋四郎兵衛が企てのままに蔵王山上歌碑の一首を作りて送る」とあり、蔵王山熊野岳山頂に建つこの歌碑は、茂吉が生存中に建立を許した唯一の歌碑である。

出羽国では男子が元服すると、出羽三山と呼ばれる月山、湯殿山、羽黒山へ参詣する風習がある。出羽三山は、古くから修験道の霊山で信仰の山であり、修験者が山岳練行の修行の場とした。茂吉の生家でも代々伝承され、茂吉は1896(明治29)年3月に上山尋常高等小学校を卒業し、同年7月14歳の時に、初めて父守谷熊次郎(後に伝右衛門)に連れられて月山を越えて

---

\* 教授/倫理学

湯殿山に参詣した。『念殊集』の「初詣」<sup>1)</sup>に仔細が語られている。そして、夙慧であった茂吉は同年8月25日に、故郷を離れ父に連れられて浅草区東三筋町54番地で養父紀一が開業していた浅草医院へ寄寓することとなった。上京前に出羽三山へ行き、出羽国へ別れを告げたのであろう。なお茂吉は、1930(昭和5)年7月になると数え年15歳となった長男の茂太を連れて、三山に参詣している。次は、1928(昭和3)年に湯殿山へ参拝したときの歌である。

谷ぞこに涌きいづる湯に神いまし吾の<sup>ひとよ</sup>一世も神のまにまに

(『ともしび』昭和3年「三山参拝の歌」)

茂吉は、湯殿山の谷底から湧出する湯のなかに神がいる。湯そのものが神であり、湯殿山がすべて神なのであるという。そこには茂吉の無常感を媒介とした、汎神論的な世界観が展開されているのである。次は長男茂太と参拝したときの歌である。

うつせみは浄くなりつつ神にまもられてこの谿くだるいにしへも今も

ちはやぶる神ゐたまひてみ湯の涌く湯殿の山を語ることなし

(『たかはら』昭和5年「湯殿山」)

茂吉は湯殿山参拝歌について「この敬虔な心は、出羽の国に育ったもののおのずから持つ心であったから、わが子にもそれを持たせたいのであった。六根清浄、御山繁盛と唱へるとき『うつせみは浄くなりつつ』であった。(略)み湯の涌く湯殿の神のことは妄りに語らぬ習慣になっている。私も少年のころ、参拝了えて帰った人からもくわしい様子を聞いたことがなかった。神の湯は、梵字川となってとどろき流れるのであった<sup>2)</sup>という。茂吉は茂太と高橋四郎兵衛(茂吉の弟)が同道し、月山から、鉄の鎖にすがって谿(御月光)をくだり、無言で湯殿山に参詣し、羽黒山まで足をのばしたのであった。

蔵王の麓で幼少年期を過ごした茂吉の宗教的な原風景を考察するに、一つには実父の信仰心である。「三山や蔵王あたりを信心して一生四足を食わずにしまった」<sup>3)</sup>という。一つには山岳信仰による神仏習合的な色彩が強いということである。一つには、金瓶村宝泉寺の佐原隆應和尚の薫染による浄土教的なものを併せ持っていることである。茂吉は、生家の近隣にあった宝泉寺に毎日のように出入りし、学問的なことだけではなく隆應の人柄にも触れた。隆應も茂吉を深く愛し、その才能を見抜き、将来は自らの後継者と考えたほどであった。茂吉の仏教的な、とくに浄土教の要素はごく自然に醸成されたのであった。このように、熱心な念仏信者である父と、菩提寺の佐原隆應と、山岳信仰の宗教性をもつ山形県の風土が三位一体となり、茂吉の血となり肉となり、形成されたのである。このように、茂吉には仏教的なものが、体内に血脈相承したと言えるのではないだろうか。

## 2. 青年茂吉と浅草寺

上京した翌月の1896(明治19)年9月から、茂吉は東京府開成尋常中学校に編入学した。当時、同校は神田淡路町のニコライ堂下にあった。茂吉は、医者となるべき途が決められていたのである。また、茂吉は養父紀一の浅草病院へ寄寓したのであるが、すぐに正式の養子となったわけではない。茂吉がはじめて浅草寺<sup>4)</sup>へ詣でた月日は判明しない。しかし、おそらく上京後すぐに、徒歩圏内にある浅草寺へ詣でたと考えるのが自然ではないだろうか。というよりも、金瓶村から上京した茂吉にとって浅草は、どんなに刺戟的で魅力的な街であったのであろうか。

鳥だにも新たに年をとりぬらん凌雲閣にとんび鳴くなり

(『短歌拾遺』明治32年「金龍山に詣でて」)

これは、開成中学校3年生(17歳)であった茂吉が、1899(明治32)年1月7日に金龍山浅草寺に詣でた時の歌であり、次兄守谷富太郎宛書簡に六首を記したうちの一つである。凌雲閣は1890(明治23)年に建てられ、通称浅草十二階と呼ばれた。52メートルの高さを誇る赤煉瓦づくりの八角形の塔で、浅草のランドマークであった。富太郎は、出征中であり、台湾宜蘭守備隊歩兵第八大隊第四中隊に所属していた。書簡には次のようにいう。

観音様へと指(ママ)づれは老若男女相交へ恰も蜘蛛の子を散らすが如し(略)愚弟も金龍山に指(ママ)で、一年の安寧幸福幸運を祈り合セテ兄上様の御無事を願ひ<sup>5)</sup>

茂吉は、浅草医院から徒歩で金龍山浅草寺へ初詣に行ったのであろう。新堀通りを東本願寺に向けて北上し、浅草通りを右折すればよい。素直に新年を言祝いだ歌で、とくに秀歌でもない。隅田川があり、当時は田圃も残っていて、とんび(とび)が生息して、凌雲閣の上空をとんびが舞っていたという情景だ。昔も今も浅草寺は初詣で賑わい、茂吉を含め人々が観世音菩薩へ現世利益を願う姿は同じようだ。浅草という磁場に老若男女が引き寄せられるのは、金龍山浅草寺という観音霊場という信仰の場、六区を中心に劇場や後には映画館が建ち並ぶ歓楽街、さらには裏には玉の井、吉原という遊里(悪所)をひかえた場であったからである。同年5月になると、茂吉は浅草区三筋町から神田区和泉町一番地の東都病院で起居することとなった。東都病院とは、養父紀一により浅草医院が手狭になったので開いた病院である。茂吉には『三筋町界限』という随筆があり、浅草についても語られている。

その頃の浅草観音境内には、日清役平壤戦のパノラマがあって、これは実にいいものであった。(略)十銭の入場料といえはそのころ惜しいとおもわなければならぬが、パノラマ場内では望遠鏡などを貸してそれで見せたのだから如何にも念入であった。師団司令部の将校等の立っている向うの方に、火災の煙が上って天を焦がすところで、その煙

がむくむく動くように見えていたものである。(略) そのころ仲見世に勸工場があって、ナポレオン一世、ピスマルク、ワシントン、モルトケ、ナポレオン三世というような写真売っていた。(略) そういう英雄豪傑の写真に交って、ぼん太の写真が三、四種類あり、洗い髪で指を頬のところに当てたものもあれば、桃割に結ったのもあり、口紅の濃く影<sup>うつ</sup>っているものもあった。私は世には実に美しい女もいればいるものだと思い、それが折にふれて意識のうえに浮きあがって来るのであった。<sup>6)</sup>

茂吉が浅草三筋町に居住していた頃は、「春機発動期」であり、「今どきの少年の心理などよりはまだまだ刺戟も少く万事が単純素朴」で「それでも目ざめかかったりビドウのゆらぎ」<sup>7)</sup>という。思春期の茂吉にとって浅草は、艶冶なぼん太の姿に動悸するような刺戟的な場所であったことが想像される。随筆の内容は、浅草寺界隈の風物詩であり、浅草寺への信仰心を吐露したものである。

茂吉は開成中学校から第一高等学校へ進学し、在学中の1903(明治36)年8月30日には、紀一は赤坂区青山南町五丁目に偉容を誇る青山脳病院を創設した。そして、茂吉は1905(明治38)年6月に卒業し、同年7月には、漸く長女てる子の婿養子として入籍した。そして同年9月には東京帝国大学医科大学へ入学した。金瓶村から上京して以来食客と呼ばれるような立場であった茂吉は、精神病医である養父紀一の期待に応え、晴れて自らの居場所を確保したのであった。その間の茂吉の境涯を慮るに粒粒辛苦の日々を積み重ねたのであった。そして、医科大学へ進学後は精神病医となることが宿縁であった。

浅草の佛つくりの前来れば少女<sup>をとめ</sup>まほしく落日<sup>いりひ</sup>を見るも

(『赤光』明治38年「折り触れ」)

この歌の頃は、茂吉はすでに青山脳病院に起居し、医科大学へ通学していた。「佛つくり」とは、仏像だけではなく、仏壇、仏具等を商う店舗であろう。田原町近辺では、現在でも仏具屋が軒を並べている。店番が男子ではなく少女である。賑やかな仲見世とは違い、客も少なく、店番ものんびりとした情景である。おそらく浅草の少女を思い、故郷の少女の面影を偲んだのであろう。青年期の茂吉は、信仰心をもって浅草の観音霊場に参拝もしたが、浅草の醸し出す江戸情緒の残り香と大人の世界を垣間見たことは、忘れがたいものであろう。

### 3. 壮年茂吉と浅草寺

茂吉は、東京大学医科大学を卒業すると、1911(明治44)年7月に東京府巢鴨病院医員となることを命ぜられた。巢鴨病院時代である1913(大正2)年10月に、東雲堂より第一歌集『赤光』を刊行した。「おくに」「おひろ」「死にたまふ母」「悲報来」の連作は、当時の歌壇に新風をもたらした。

かなしみてたどきも知らず浅草の丹塗<sup>にぬり</sup>の堂にわれは来にけり  
 あな悲し観音堂に癩者<sup>は</sup>みてただひたすらに銭欲りにけり  
 浅草に来てうで卵買ひにけりひたさびしくてわが帰るなる

（『赤光』大正2年「おひろ 其の一」）

本論では、「しらたまの憂いのをみな」である「おひろ」が誰であるかを探索しない。茂吉は「おひろ」との離別で、悲しみて途方に暮れ、いつのまにか浅草の丹塗の堂、浅草寺本堂へ足を運んでしまったという。本堂は関東大震災と戦災と二度の災難にあい、現在ではコンクリート造となっているが、当時は江戸時代以来の丹塗りの木造の本堂であった。茂吉の場合には「朱、赤系統の色は常に激しく揺れ、高まる情念の象徴」<sup>8)</sup>であったのであろう。

また、浅草寺本堂である観音堂には、ハンセン病者が物乞いをしていた。浅草に限らず、寺社の参道や駅頭にはハンセン病者等による物乞いが行われていた。悲しみを抱き、慰めを求めて観音詣に來たのに、ただひたすらに頭を下げ、金銭の施しを願う病者の姿に、なお一層心が痛むのであった。その後、ぶらりと浅草寺に来てお参りをしたものの、この先に出掛ける当てもない。卵売りの露天商に立ち寄り、ゆで卵を購入したのである。そして、帰宅するのであった。「おひろ」との別離にうらぶれた茂吉にとって、浅草は特別な地であり、悲しみを包み心を癒す場であったのであろう。

茂吉は、1917(大正6)年12月に、長崎医学専門学校教授として長崎へ赴任した。1920(大正9)年1月6日にインフルエンザ（スペイン風邪）に罹患し、肺炎を併発し2月24日まで療養した。しかし、その後咯血を見て、長期療養生活を余儀なくされた。11月2日になり漸く病が癒えて、職場へと復帰した。そして、11月11日頃には、長崎医学専門学校教授を致仕し、欧州留学を決意したのであった。次は、その頃に詠まれた歌である。

浅草の三筋町<sup>みすぢまち</sup>なるおもひでもうたかたの如<sup>ごと</sup>や過ぎゆく光<sup>かげ</sup>の如や

（『つゆじも』大正9年「長崎」）

「十一月五日。長尾寛済十月八日東京にて没す行年四十。東京巢鴨真性寺に葬る。寛済は予より長ずること一歳なりき」という詞書がある。インフルエンザに罹患し生死を彷徨した茂吉には、一歳年長の長尾寛済の死が、かつて青年期を過ごした浅草三筋町の思い出を回想させるのであった。そして、1921(大正10)年3月に欧州留学の準備のために長崎から帰京した時に、次の歌を詠んだ。10月には、欧州留学に向け出発した。

浅草の八木節さへや悲しくて都に百日<sup>ももか</sup>あけくれにけり

（『つゆじも』大正10年「帰京」）

浅草の劇場では八木節も結構盛んなようであった。八木節は、日光例幣使街道にあたる旧八木宿での盆踊りと言われる。木馬館で安来節が上演されていたような雰囲気であろうか。

浅草に行きつつある心地にてこの俗謡を一夜たのしむ

(『遍歴』大正12年「十二月九日(日曜)、Pterhof」)

東京の妻のおくりし御守護<sup>みまもり</sup>をおしただきてカバンにしまふ

(「四月十四日(月曜)アララギ三号来『遍歴』大正13年)

茂吉は1923(大正12)年7月19日、オーストリアのウィーンを去り、同日ドイツのミュンヘンに転学する。博士論文も完成したので、1924(大正13)年4月には、ドナウ川の源流をたずねて旅立った。「四月十四日(月曜)、アララギ三月号来」と詞書にある。これは浅草寺の御守護ではないかと思われる。茂吉は、ありがたく恭しく顔の上にささげ、カバンにしまったのである。茂吉は随筆の『癡人の随筆』で「そのころ私は観世音の守護を肌身離さず持ってゐたが、若し宗教家にそのことを話すなら、それは観音力のためだと云ったかも知れない」<sup>9)</sup>というが、同じものかどうか不明である。

1924(大正13)年12月29日、青山脳病院は午前零時25分餅つきの残火から発火し、3時25分に漸く鎮火したが全焼した。300余名の入院患者中20名が焼死するという惨事であった。時価160万円の損害と言われ、火災保険は11月15日付で失効していた。茂吉は、欧州留学帰国の途次であり、香港から上海間の船上にて、この惨状を知った。同年12月30日付『日本帰航記』には、次のように記す。

夜半二目ガサメテヤハリ夢デハナイカト思フコトガアツタ。コレヲ神明ノ思召ダトスルト、今後ドーシトラバヨイカ(略)言<sup>こと</sup>なくひれふす。言<sup>こと</sup>たえにけり天つ日のまへに。神々よ言なくをろがむ。<sup>10)</sup>

さらに、1925(大正14)年1月1日付『日本帰航記』には、次のように記す。

わたつみの神、陸の神よ、はやいたしかたなし。われにしづかなる力を養はしめたまへ。心の張りを得しめたまへ。金をあたへたまへ。<sup>11)</sup>

また、同年12月31日、日記には「カクシテ凡テノ苦艱ガ兎ニ角切り抜ケラレタ。コレハ神明ノ後加護デナクテ何デアルカ。天地天(ママ)明ニ感謝シ奉ル。」<sup>12)</sup>という。同年3月8日付、朝鮮釜山順治病院長森路寛宛の書簡でも「どうも僕は只今苦しい生活をしてゐる。けれども神明は僕を捨てない事を信じてゐる。」<sup>13)</sup>いう。

茂吉は神ではなく、神々と言う。天地神明、わたつみの神、陸の神と言う。上田三四二は

次のように言う。

茂吉は繰り返し神明の加護を口にす。神や仏が信仰として念持されているわけではない。凡夫が凡夫たるあわれを、おなじくあわれの色に染った自然に向って訴えている趣きである。対立者としての、また救済者としての神を、次元を超絶した向う岸に見てそれに呼びかけているのではない。祈る形はおなじでも、彼の呼ぶものは有限者みずからと同じ次元、同じ延長線上にあるところの他者、すなわち有情化された自然をいくらかも出ていなかった。そうしてこれが、彼の諦念が現世における諦念であり、彼の彼岸が、うつし身のなかの彼岸にとどまっていることの意味である。<sup>14)</sup>

茂吉は、このように神々だけを崇拜するのではなく、観音力にも崇拜し自らの護持を願う、汎神論的な世界観であると言えよう。茂吉には宿命に忍従しようとする不安で逞しい勇氣と、救済を信ずる寂しく敬虔な気持とが交錯しているのである。

次の連作には「八月三十日浅草観世音詣」と書書がある。日記には「患者三人ばかり。夜浅草ニ行ク。大地震三周年となりしゆゑ、夜にいりて浅草観音にもうづ」<sup>15)</sup>とある。ここでも、観世音菩薩に、目を閉じて「まもらせたまへ」と乞い祈る姿がある。また、4年前に聞いた八木節の思い出を語る。

みちのべの白きひかりの燈ともしびに草かげらふは一つ来て居り  
浅草の日のくれづれの燈に青き蟲こそ飛びすがりけれ  
電燈のひかりにむるこま細か蟲は隅田川より飛び来つるなり  
電燈の光まばゆき玻璃戸には蚊に似たる蟲むれて死につつ  
四よとせ年まへわれも聞きつつかなしみし八木節音頭すたれ居りたり  
眼まなことちて吾は乞ひ祈むありのままにこの生いきの身をまもらせたまへ  
月赤くかたむくを見し夜ふけて蟲が音ねしげき道を来しかば  
蟲が音ねはしきりに悲し月よみの光あかあかと傾きゆきて

（『ともしび』大正14年「草蜉蝣」）

1926（大正15）年1月1日の日記には「天地神明ヲ拝シ、昨年ノ御加護ヲ感謝シ奉リ、開運、御加護ヲイノリ奉ル。」<sup>16)</sup>さらに同年1月3日には「今日ハ診察シナクトモヨイカラ茂太、輝子ヲツレテ浅草観世音ニ参詣ニ行ク。感謝シ祈願ス。」<sup>17)</sup>という。参詣後は活動写真を鑑賞し、牛肉を食し、日本の活動写真を鑑賞する。さらには、安来節を見ている。1927（昭和2）年1月1日の日記には、「浅草観音菩薩デハ御クヂハ凶、末吉ナリ。」<sup>18)</sup>とある。同年の12月30日には、上野と浅草間にて地下鉄が開業し、運賃が10銭であった。

1928（昭和3）年1月1日の日記には、次のようである。浅草寺を参拝すると、昨年の初詣に続き、お神籤を引いている。

省線電線(ママ)ニテ上野ニ来リ、圓太郎ニテ浅草ニ来タノハ二時頃デアル、ソレヨリ  
うなぎヲ食シタノハ三時頃デアル。ソレヨリ観世音菩薩ヲ参拜シ幸運ヲ祈願シ奉ル。御  
みくじ、九十一吉<sup>19)</sup>

茂吉と浅草寺の因縁浅からぬ関係を期待するならば、ごく一般的な浅草詣とも言えよう。そ  
して、同年2月に浅草寺に詣で、浅草を題材に連作をつくった。

観音の高きいらかの北がはは雪ははつかに消え残りけり  
人だかりのなかにまじはりうつせみの命のゆゑの説法を聴く  
浅草のきさざぎ寒きゆふまぐれ石燈籠にねむる鶏<sup>とり</sup>あり  
川蒸気久しぶりなるおもひにてあぶらの浮ける水を見て居り  
みちのくより稀々に来るわが友と観音堂に雨やどりせり

(『ともしび』昭和3年「浅草をりをり」)

上田三四二は「彼の血は観音力を信じたが、彼の頭は、その現世利益をどこまで本気にした  
か、疑わしい。彼の本能は、艱難にあつて神明の加護を求めたが、神々の前にひれ伏したとき、  
彼は神に声があるとまでは思っていなかっただろう。『神々よ、ほくをまもりたまへ』 - こ  
んな言葉は、形はまるで前のめりの他力本願ながら、内には、そう言うことによって自ら耐え、  
転機に際して勇気のはずみを見つけようとする自己防衛の心があつた」<sup>20)</sup>という。

観世音の守護により「ほくをまもりたまへ」と呟く茂吉の仏教観は、どのようなものであろ  
うか。観音力にすぎる茂吉が存在することは間違いない。

浅草の五重の塔を一月の休みのゆゑにけふ見つるかも

(『拾遺』6年「手記雑一、十一月三日」)

浅草の五重の塔をそばに来てわれの見たるは幾とせぶりか

(『石泉』昭和7年「新春小歌」)

1932(昭和7)年1月1日の日記には「輝子、山口君、千代、豊ト五人ニテ浅草観音ニ詣ヅ。  
活動写真ヲ見、魚料理あんこう鍋ヲ食ス」<sup>21)</sup>とある。茂吉の初詣は必ずしも浅草寺とは限らない。  
青山脳病院から近い大正9年創建の明治神宮への初詣もある。前年の1931(昭和6)年12月31  
日の日記には「今年ハ家内一同無事デ母上モ丈夫、西洋ガ卒業シ、米国モ一寸病ンダガ無事手  
術ヲシタ。輝子子供等モ丈夫デ何ヨリ忝イ。(略) 世間ハ僕ヲニクミ目ノ上ノ敵トシタガ、力  
量ニ於テ僕ヲ征服ガ出来ズニシマツタ。病院長トシテモ、アレハ歌ヨミデ医者デハナイナドト  
云フガコレモ力量ニ於テ實際ノ成績ヲアゲルノダカラ信用ガアルノデアル。スベテ神明ニ感謝  
シ心シツカニ今年ヲ終リ。新年ヲ迎ヘヨウ」<sup>22)</sup>とある。

茂吉は精神病医としての矜持を持つが故に、医者としての責務を果たさぬ「歌よみ」等という蔑視には耐えられない。茂吉は精神病医として病者に寄り添い、病院長として病院経営の重責を果たし経営の安定化を図ったのである。そして、「スベテ神明ニ感謝シ」と日記を結ぶ。

浅草や吉原かけて寒霧のたなびくころを人むらがりぬ

（『石泉』昭和7年「寒霧」）

この歌には「十二月の言葉（雑誌日の出のため）」と詞書きがある。次に1937（昭和12）年になると、時局がら、出征する兵士の無事を祈願する家族への歌がある。

浅草のみ寺に詣で戦にゆきし兵の家族と行きずりに談る

（『寒雲』昭和12年「街頭小歌」）

浅草の五重塔のまちかくに皆あはれなる命うらなふ

（『寒雲』昭和12年「随縁雑歌」）

浅草のみ寺にちかくわが歩む守るがごとく月の牙ゆるに

（『拾遺』昭和12年「二月十八日永井ふさ子氏宛絵ハガキ」）

さて、アララギ会員で子規の遠縁にあたる永井ふさ子とは、1934（昭和9）年9月16日、向島百花園で開催された正岡子規三十三回忌歌会で相知り、急速に親密となった。茂吉は、前年に妻てる子が銀座の「ダンスホール事件」に関わり、その醜聞が新聞で報道されるに及び、「精神的負傷」を受けたとし、妻てる子に別居を命じたのであった。1936（昭和11）年1月18日には、茂吉はふさ子と共に浅草へ詣でた。ふさ子は次のように記している。

正月十八日の浅草寺は参詣人でにぎわっていた。仲見世の雑踏の中を、そこここをのぞきなどしながら本堂の前まで来た。そこで先生は掌に十銭玉を一つ渡し、自身も賽銭箱へ投入して合掌された。段をのぼり堂の右手の所で観音経を一部買って下さった。<sup>23)</sup>

参詣後、映画館へ行き、好物の鰻を食べた。

さきほどの観音経をひらき、普門品第二十五の中の『設欲求女便生端正有相之女』を指して『これだ』と言って読んできかされた。外に出た時にはすっかり夜になっていた。公園には人気もすでになく瓢箪池の噴水が凍っていた。この池のほとりの藤棚の下ではじめての接吻を受けた。<sup>24)</sup>

観音経にある「設欲求女便生端正有相之女」とは、『法華経』の「観世音菩薩普門品第二十五」にある「若し女人ありて、設し男子を求めんと欲して、観世音菩薩を礼拝し供養せば、便ち福德・智慧の男子を生まん。設し女子を求めんと欲せば、便ち端正有相の女の、宿、徳本を植えしをもて衆人に愛敬せらるるを生まん。」<sup>25)</sup>の一文である。茂吉がふさ子にこの一文を読んで聴かせた意図は、はかり難いが、観音経を篤信する茂吉が、ふさ子を観音菩薩の化身

として愛すると譬えたのであろうか。この接吻の場面を切り取り、山上次郎は「恐らくは、茂吉の観音様の御許しによって自分に与えられた化身の乙女として抱いたであらうし、ふさ子もまだ自ら崇拜してやまない師のくちづけ、身をふるわせつつも快く、しかも無限の感動のうちに受けたにちがいない」<sup>26)</sup> という。あまりにも尊敬する茂吉を情熱的に描写し、美化していると言わざるをえない。翌月には二・二六事件が起きた軍靴の登音が響く世相を勘案するに、茂吉がこのような大胆な行動をとったという情景は考えにくい。むしろ、茂吉の日頃の言動や行動からすれば噴飯ものの情景である。しかし、いずれにせよ茂吉は逢瀬を重ねる場として、観音霊場たる浅草寺を選択したのであった。藤岡武雄に年譜によれば、同年9月24日にも「永井ふさ子を案内して亀戸普門院の伊藤左千夫の墓に詣でる。その後浅草にゆき映画をみる」<sup>27)</sup> とある。茂吉は三筋町時代から慣れ親しんでいる浅草寺へ、ふさ子を帯同し何を祈願したのであろうか。ただ単に歓楽地の浅草へ行ったただけだろうか。茂吉にとって、浅草は常に安らぎ、憩い、心を癒す聖域であり、この場にふさ子と時間を共有することは、茂吉のふさ子への愛惜が深いということであろう。茂吉はふさ子と邂逅し、溺愛するが、やがて世間体を気に掛ける優柔不断な茂吉の態度は徐々に離別へと向かった。

次は、1939 (昭和14) 年に浅草寺を題材とした歌である。古泉千樫と共に左千夫との浅草の思い出を歌に詠む。

浅草のみ寺にちかく餅<sup>もちひ</sup>くひし君と千樫<sup>ちかし</sup>とわれとおもほゆ

(『寒雲』昭和14年「左千夫忌」)

この歌には「七月二日於発行所」と詞書きがある。

浅草のみ寺をこめて一目<sup>ひとめ</sup>なる平<sup>たひ</sup>なる市街かなと見おろす

(『寒雲』昭和14年「小吟」)

#### 4. 晩年茂吉と浅草寺

茂吉は、敗戦後も大石田に疎開を続けていた。大石田では肋膜炎に罹り体力も衰えた。漸く1947 (昭和23) 年11月4日に帰京の途に着き、世田谷区代田1丁目に落ち着いた。歌集『つきかげ』は茂吉最後の歌集である。同年12月24日には、『時事新報』の依頼で木村莊八画伯と共に、東京の各地を精力的に巡った。その記事は『むく鳥印象記』として、翌年に新聞に連載された。その時に浅草と観音堂にも行っている。その見聞を次のように記している。

壮大な浅草寺も仁王門も無くなって、小さい観音堂が建ってゐた。『十萬来人皆対面』といふ聯は、ただ菩薩のすがたを彷彿せしめるに過ぎなかった。五重塔も無くなり、二基の露仏、鐘楼を前景にして、対岸の麦酒会社まで一目で見えるまでになってゐた。(略) 三月九日の空襲の時には、自分は未だ青山にゐて、こころ下町一円が紫立って焼けるのを遠望したのであった。(略) 東京都民はかの観音堂の大伽藍をも焼いてしまった。(略) 関東大震災の時には、仲見世まで焼けたに拘らず、仁王楼門も本堂も焼けなかった。そ

ここで観音力は火中にあっても焼亡せず、海中にあっても溺没しないといふ経文そのままだと思ってゐたが、焼ける物は焼けるといふことになってしまった。欧羅巴のいづれの大都市にも、殆ど必ずこの浅草のローカルがある。久しぶりで田舎から帰って来た自分は、この浅草に無限の愛惜を感じる。さういふ意味で観音力は滅びないからである。<sup>28)</sup>

次の歌は、茂吉の浅草への愛惜と観音力への信仰を踏まえて詠んだと理解できよう。

浅草の観音力もほろびぬと西方の人はおもひたるべし

（『つきかげ』昭和23年「帰京の歌」）

浅草の晩春となり人力車ひとつ北方へむかひて走る

（『つきかげ』昭和23年「猫柳の花」）

茂吉は、1950（昭和25）年10月19日に軽い脳溢血を起こし、左半身に麻痺がおそった。完全麻痺ではなく次第に回復したが、その後は左脚を軽く引きずって歩くようになった。同年10月22日に、新宿区大京町に転居した。ここが終の棲家となった。

浅草の観音堂にたどり来てをがむことありわれ自身のため

この現世清くしなれとをろがむにあらざりけりあ、菩薩よ

（『つきかげ』昭和25年「ひもじ」）

前述した『赤光』「おひろ」の歌に対応するように、浅草寺観音堂へ「たどり来て」、自分自身のために、自らの安穩を願ひ観世音菩薩へ拜むのだという。続いて、「この現世清くしなれ」と拜むのだという。

ここに、1952（昭和27）年3月20日に、茂吉が浅草寺に参詣した時の写真がある。妻てる子、長男の茂太、次男の宗吉（北杜夫）が同行した。茂吉は善男善女の雑踏の中で、観音堂に向かい、おみくじ処の前で茂太に後ろを抱きかかえられている。必死に手袋（軍手）をはめた左手をのばしているが、身体が麻痺しているため、隻手で合掌している姿が痛々しい。口を幾らか開け、眼は正面よりやや高めで、まさに拜もうとする祈りの刹那である。隻手の音声が聴こえたであろう。茂吉にとって、最後の浅草詣でとなった。故郷金瓶村から上京して以来、艱難辛苦に出会い、その度毎に観世音菩薩のご加護を願ひ、ご慈悲を受けた茂吉にとって、万感胸にこみ上げるものがあつたであろう。もはや地位も名誉も何も欲しない、生かされてきた自分への感謝の気持ちだけが表出している、まさに純粹に信仰の人の姿である。ましてや、門弟は語らず隠蔽していたが、茂吉は認知症となり、身体の内もままならなかつたのである。これは、何も言わなくとも茂吉と浅草寺の関係のすべてを語る写真である。そして、これから一年も経過することなく茂吉は翌1953（昭和28）年2月25日に亡くなった。

## 5. まとめ

うつしみの狂へるひとの哀しさをかへりみもせぬ世の人醒めよもろびと覚めよ

(『ともしび』大正10年「賀歌」)

この歌は、恩師呉秀三の東京帝国大学医科大学在職25年を祝い、仏足石歌25首をつくった中のものである。ここには、病者本位の治療を目指した呉秀三の精神を引き継いだ精神病医茂吉が、差別され排除された精神病患者の苦しみと哀しみを世の人(世間)に、知らしめようとする魂の叫びが滲み出ている。精神病医となり、この理不尽な苦しみと哀しさは、絶えず茂吉の体内に憤りとして沈潜していたのである。

このことを前提として茂吉の人生を回顧するに、茂吉にとって浅草寺とはどのような存在であったのであろう。茂吉は「観音力」に帰依し、御守護も肌身離さなかったが、神々にも帰依した。よって、観世音菩薩にだけ、ひたすら帰依したのではない。よって、浅草寺や観世音菩薩への篤信者とは言い難い。しかし、茂吉は故郷金瓶村から上京し、浅草三筋町で起居した機縁で、折りに触れて浅草寺に参拝した。参拝後は、劇場や映画館にも足を運び、好物の鰻も食べた。永井ふさ子とは、逢瀬の場として出掛けた。それは、言うまでもなく浅草が第二の故郷であり、心癒される場であったからであろう。とくに、欧州留学後の茂吉は、筆舌に尽くしがたいが艱難辛苦を超克するに、神々の加護を祈った。また、観世音菩薩に額づき加護を祈ったのである。精神病医として、さらに青山脳病院院長として、精神病患者の逃走、自殺、暴力に悩まされ、その重責が茂吉の双肩にかかった。茂吉は精神病患者に左頬を打たれても、医者職業倫理に従い、中庸を保ち憤怒の情を沈黙により制したのである。このような状況下で、自らが「観音力」に帰依することにより、自らを鼓舞し、勇気づけられ、人生の苦難に耐えることができたのであった。このような祈りの声を発する茂吉の姿は、他者の眼から見れば滑稽であり、場合によっては愚直にさえ映ったであろう。

茂吉のおみくじを引き、吉凶を占い、御守護をおしひき、神明に祈願する等の行為は、茂吉の土俗的な信仰で、金瓶村の村童のうちに涵養されたものであり、終世にわたり茂吉の信仰心として脈々と流れるものであった。従って、浅草寺の観音力を信じた茂吉であるが、あくまでも現世利益的であり、彼岸をどこまで意識したのであろうか。上田は「それは生を超絶した彼岸の彼岸ではなく、生ある限り、生のなかでのみ夢みられた此岸の彼岸にすぎなかった」<sup>29)</sup>と断じている。また、中野重治は茂吉の自然観を「いかにも日本的な、日本人持ち前のそれであり、草にも木にも、家の棟にも竈にも神を見るという、しかもそこからして、煩瑣な思弁的宗教哲学を決して編纂しなかったところの、いわば古代日本人以来の日本の自然観である」<sup>30)</sup>という。茂吉の信仰は一神教ではない。絶対他力ではない。汎神論的な世界のなかで、茂吉は生活し、ひたすら祈るのであった。

注

- 1) 『斎藤茂吉全集』第5巻、岩波書店、1974年、220～222ページ。
- 2) 斎藤茂吉『作歌四十年』筑摩叢書177、筑摩書房、1971年、158ページ。
- 3) 第5巻、205ページ。『念珠集』所収。
- 4) 「浅草寺縁起」によれば、628年に檜前浜成、竹成兄弟が、江戸浦に漁撈中、一体の観音像を感得し、その後出家し、自宅を寺とし礼拝したという。645年には、勝海上人がこの地に来て、観音堂を建立し、夢告により本尊を秘仏としている。平安初期には円仁（慈覚大師）が来山し、お前立ての本尊を彫刻したという。江戸時代になると、徳川家祈願所となり、堂塔が整備され、江戸文化の中心として繁栄した。
- 5) 第39巻、8ページ。
- 6) 第6巻、446～447ページ。
- 7) 同巻、445ページ。
- 8) 吉田漱『「赤光」全注釈』短歌新聞社、1991年、85ページ。
- 9) 第6巻、476ページ。
- 10) 第29巻、68ページ。
- 11) 同巻、70ページ。
- 12) 同巻、149ページ。
- 13) 第33巻、634ページ。
- 14) 上田三四二『斎藤茂吉』筑摩叢書24、筑摩書房、1964年、170ページ。
- 15) 同巻、120ページ。
- 16) 第29巻、150ページ。
- 17) 同巻、同ページ。
- 18) 同巻、317ページ。
- 19) 同巻、457ページ。
- 20) 上田三四二、前掲書、176ページ。
- 21) 第30巻、113ページ。
- 22) 同巻、111～112ページ。
- 23) 永井ふさ子『斎藤茂吉 愛の手紙によせて』求龍同、1981年、14ページ。
- 24) 前掲書、15ページ。
- 25) 『法華経』下巻、岩波文庫、1976年、248ページ。
- 26) 山上次郎『斎藤茂吉の恋と歌』新紀元社、1965年、315ページ。
- 27) 藤岡武雄『新訂版・年譜 斎藤茂吉伝』沖積舎、1987年、261ページ。
- 28) 第7巻、642ページ。
- 29) 上田三四二、前掲書、182ページ。
- 30) 中野重治『斎藤茂吉ノート』筑摩書房、1964年、170ページ。

(2012.9.26 受稿, 2012.12.4 受理)